あの時 あなたは

きょう15日で、太平洋戦争の終結から70年を迎えました。北日本新聞の企画「あの日の空」の取材班には、読者の皆さんのお便りがたくさん届いています。この特集では、1945（昭和20）年8月15日にラジオで流れた「玉音放送」にまつわる手紙やはがきを中心に、当時の紙面も紹介します。「日本のいちばん長い日」の体験を通じ、若い人もお年寄りも戦争を見つめ直すきっかけになればと考えました。テーマは「それぞれの8・15」です。

上官 説明してくれず

吉田 七郎さん(90)
高岡市五福町

1945年7月25日に陸軍歩兵富山連隊に入営したものの、8月2日の富山大空襲で兵舎が焼かれ、所属隊は最終的に、現在の射水市青井谷（小杉）にある金山小学校へ移った。

8月15日の玉音放送は、「天皇陛下の放送がある」とグラウンドに集められ、机の上に置かれたラジオで聞いた。

しっかり音を聞き取れず、内容がよく分からなかった。周囲は「戦争が終わったんじゃないか」とざわざわする一方、「頑張ってくれ」という激励ではないか？」という意見もあり、終戦を迎えたという感覚はなかった。上官は下っ端の兵隊に何も説明してくれなかった。

その後は「臨時憲兵」との名で高岡市の本丸会館に駐屯させられた。「もう1回、アメリカと戦争をする」と言われていた。だが使い走りのような仕事しかなく、上官たちがいる高岡ホテルに酒を運ばされたりした。騒がしい雰囲気が伝わってきたので、今になって考えると、やけ酒でも飲んでいたのだろう。

9月18日の武装解除を受けて復員し、ようやく「戦争が終わった」と実感した。

厳格な祖父が涙

渋谷 園子さん(76)
高岡市神田新町

玉音放送を聞いたのは空の真っ青な暑い日だった。疎開先だった白谷（現・小矢部市）の山奥、母方の祖父母の家で聞いていた。周辺でラジオがあったのは祖父母の家だけ。同じ村落に住む老人が全員集まり、ラジオから流れてくる雑音混じりの終戦の知らせに、耳を傾けていた。

「祖父はどんな表情で聞いているのだろう」。普段感情を全く外に出さない厳格な祖父。そっと見ると、祖父の目から涙が1粒だけ落ちた。「息子が戦死した時でさえ泣かなかったのに」と驚いた。涙を見せたのはその1粒のみで、後は一切泣かなかった。「我慢していたが、相当悔しかったのだろう」と思った。集まった人は皆、誰も話さず黙っていた。私は庭のネムの花に目をやり「ようやく家族が一緒に暮らせる」とばかり考えていた。とにかく安心感でいっぱいだった。

疎開していたのは約1年半。学校まで片道5キロ、近くに住む子どもはおらず、友達はウシやネコ、ニワトリだけだった。寂しくていつも声を押し殺して泣いていた。我慢魂が培われ、当時のことは今でも頭に残っている。

約束果たせ ほっと

池上 光雄さん(92)
富山市町村

石巻（宮城県）の鵜六（ムロ）一六九部隊に所属していた1945年4月、南方行きの命令を受けた。行き先は告げられず、下関（山口県）に行き、船が来るまで待機した。

そのうち空襲の頻度が増し、山間部の小学校へ避難した。近くの農家が親切にしてくれ、8月の玉音放送はその家で聞いた。出征時、両親に「必ず生きて帰る」と約束したため、終戦を迎えてほっとした。

私たちの部隊は何の成果も挙げられなかったように思う。航空機が主戦力の時代に、小型船艇に乗って手旗信号を練習した。銃さえなく、あるのは大和魂だけ。冬には防寒服も与えられずに、北上川で訓練していた。これでは日本も終わりだと、わざと足を骨折して帰郷した戦友もいた。

部隊では、南方行きが決まった隊員が面会に来た家族と涙を流して別れを惜しむ姿がよく見られた。私の母もどこで聞いたのか、石巻まで来たが、私は既に下関へ出発しており、すれ違いになった。

終戦後、9月にようやく富山へ戻った。一面、焼け野原で驚いたが、自宅周辺は無事だった。真夜中の帰宅だったが、両親と祖母が無事を喜んでくれた。

あの日の新聞

詔書を全文掲載

1945年8月15、16の両日の紙面はweb unで読めます

「けふ正午・国民よ聴け 真に空前の重大放送」

1945年8月15日の北日本新聞は、1面トップでラジオ放送を聴くことを促す異例の紙面となった。放送は「玉音放送」のことだ。

翌16日の1面は「聖断下る・米英支ソ共同宣言を受諾」「平和再建の大詔渙発さる」と見出しを立て、終戦の詔書を全文掲載した。

トップ記事は原爆によって日本は態度を改めなければならなかったとし、国民は助け合って最大の苦難を打開しなければならないと訴えた。

岡本知事は談話で「神国の不滅を信ぜよ」「一億の団結を固めよ」と呼び掛けている。2面には皇居の方角を向いてひれ伏す国民の写真のほか、「デマに迷ふな！」の見出しで公共交通の運行や配給が平常通り行われることを伝える記事が見られる。

北日本新聞社は富山大空襲で本社が全焼し、新川村寺田（現立山町）の工場で朝刊の発行を続けていた。詔書は漢字と片仮名で表記するため、紙面製作に使う片仮名の鉛活字の数が足りなくなり、急きょ印鑑業者に彫ってもらった。

ものは語る

焼け落ちなかった蔵

小川 泰さん(70)
富山市愛宕町

1945年8月2日未明に起きた富山大空襲。富山市愛宕町の小川泰さん(70)の自宅にある江戸時代に建った蔵は、炎に包まれても焼け落ちることはなかった。「あの空襲に遭った建物で、ここまで残るのも珍しいでしょう」

70年前のあの日、自身は旧婦中町に疎開していたが、家にいた祖父は命を落とした。蔵の内部の焦げた部分は、まるで炭のようだ。空気が少ない状態で蒸し焼きにされており、木炭の作り方とほぼ同じだからか。壁や天井、棚など炭化しているものの、かつての姿を伝える。

庭にある灯籠は空襲で一部が欠けており、焼夷弾の威力のすさまじさがうかがえる。小川さんは「空襲の記憶を伝えるため、自分が生きている限り、残していきたい」と話した。

空襲で蔵の内部が蒸し焼きとなり、炭化した状態で残る棚を見る小川さん＝富山市愛宕町